漢法苞徳塾資料	No. 040
区分	治療・臨床
タイトル	漢方医学の見る咳の種類と治療薬
著者	八木素萌
作成日	1997.12

『素問』に「欬論第 38」と言う篇があります。この文章は「欬論」篇の主要な記述を意識して、臨床的に運用し易いように試みたものです。李東垣の処方 は李東垣の著書の記述を意識して用いています。

日常生活と飲食のクセとによって五臓六腑のバランスが崩れ、虚弱になっている所に、病が侵入して来ます。

咳は肺にかかわる病ですが、体をたえず冷やし、皮膚の鍛練をせず、冷たいもの・体を冷やす物を過食することにより、肺は弱って病み易くなります。咳は肺の症候ではあるが、五臓それぞれの弱り方やバランスの様相によって、様々な姿を呈します。その現れ方の特徴によって、異なった名で呼ばれます。

病の外からの原因を、「外邪」とか「邪」とか言います。「邪」を受けてからすぐに症候をはっきり現す場合と、暫らく時をおいてから発症する場合があります。咳もまた同様です。

咳は、肺が「風」「寒」「燥」に傷つけられることによっておこります。「風」「寒」「燥」の邪は、四季いずれの時にもあります。冬に、春に、夏に、秋に、土用にそれぞれ邪を受ければ、その時により五臓のいずれかが特徴的な影響を受けます。

それで、「肺咳」「肝咳」「脾咳」「心咳」「腎咳」「大腸咳」「胆咳」「胃咳」「小腸咳」「膀胱咳」「三焦咳」と言う具合に命名します。

「肺咳」

咳嗽して少しくゼロゼロと、気管の息の通過が痰のために妨げているような音が、かすかに呼吸音に交じります。激しい症状を見せるときは、唾に血がすこし混ざります。

(李東垣は麻黄湯を用いました)

「大腸咳」

肺咳が長く続いて治さないでいると、大腸咳に移行して行きます。これは、咳き込むと遺失します。遺失と言うのは便が漏れることです。痔でも下痢でもないのに下着が便で汚れることになります。(李東垣は赤石脂禹餘糧湯や桃花湯で治します。更に猪苓湯を用いる事もあります)

「腎咳」

咳と共に腰や背にひかれるような、索れるような凝り痛みを伴います。甚だしい咳と共に、唾涎のようない痰が大量にでます。(東垣は麻黄附子細辛湯を用いました)

「膀胱咳」

腎咳が久しいとこれに移行し、その症状は咳とともに小水をチビル事になります。
(東垣は茯苓甘草湯を用いた)

「三焦咳」

膀胱咳が久しいと、これに移行し、咳と共に腹満を覚え飲食を欲しくなくなります。
(錢氏 異功散を用いました)

「肝咳」

咳をすると、両方の脇下に痛み、こり痛み感を覚えます。脇下というのは季脇弓とか、胸骨弓とか言われる所で、腹と胸骨の境目で胸骨部の下の方の所です。このため症状が激しいときは、寝返りがしにくいとか、胴を左右に捻ろうとすると、脇バラの所や腋の下のあたりが、何かが詰まっているような、腫れているような、凝っているような、或いは、それらが混ざりあっているような感じを覚えます。(東垣は小柴胡湯で治しました)

「胆咳」

肝咳を治さないで長引きますと、胆咳に移行します。このときは、咳をすると苦い胆汁があがってきます。胆汁を嘔吐します。(東垣は黄芩加半夏生姜湯を用いた)

「心咳」

咳をすると心痛を覚え、のどの奥に何かトゲのようなものでも、ひっかかっている感じがあって、激しいときは扁桃が腫れ、声帯がしびれているようで声が出しにくくなります。
(東垣は桔梗湯を用いた)

「小腸咳」

心咳が久しくなると小腸咳に移行します。これは、咳をすると共にオナラをおとす事になります。
(東垣は芍薬甘草湯で治した)

「脾咳」

咳すると、右の脇下が痛み、そのコリ痛み感が、インインと肩背の方に引かれます。症状が甚だしいと体を動かせません。動かすと咳が激しくでるからです。(東垣は升麻湯を用いました)

「胃咳」

脾咳が久しいと胃咳に移行します。咳と共に胃の中のものが吐き戻されて来ます。甚だしいときは、胃がひっくりかえされるとか、裏返されるような嘔気を伴う咳をして苦しいものです。
(東垣は烏梅丸を用いました)

※全体的な説明※

漢法医学はバランスの医学と言われます。五臓六腑を中心に据えて人体の生理機能のバランスを整え、また、飲食と起居動作・呼吸と情緒を整えて、体に病を治す力をつけるようにして、病を克服しようとするものです。五臓六腑は、それぞれに特有の生理的、生命エネルギー的な働きと作用力とを、全身に限なく及ぼして、生命の全体的な調和に役立っていると考えます。このような観方になっただけだとすることが諒解できないと、漢法医学特有の病の解釈と治法とは判りにくいものです。

昭和 40 年 6 月・記・八木萌・日本東洋医学会、会員・三栄薬品

鍼灸で「咳」を治療する場合に、症候の特徴と臓腑・経絡の関係を明瞭に記述しているので、『素問』欬論第 38 の記述は、極めて有用なものである。なお『素問』欬論第 38 には、薬方は書かれていない。

平成 9 年 12 月に復刻した。八木素萌・漢法苞徳塾